

メキシコ合衆国チャピngo自治大学第三回留学報告書

東京農業大学地域環境科学部生産環境工学科 4年 上野円

“光陰矢のごとし” とはうまい言い回しだと思います。意味としては“放たれた矢のように月日は素早く去っていくもの” というものですが、私のメキシコでの留学生活も目まぐるしい速さで過ぎていきます。その証拠に長期留学の報告書も三回目、メキシコでの留学生活も半年が経ってしまいました。

記憶が正しければ前回の報告書にて、前学期の成績について述べていたと記憶しています。今現在、後学期の時間割の作成や講義の見学などを行っていますので、前回と今回の間にあった主だった事柄はほぼ全て冬休みの内容となります。今回の報告書では、私が一学期間に感じたチャピngo自治大学への所見と冬休みの活動を紹介します。

チャピngo自治大学の素晴らしい点は、良くも悪くも講師、学生問わずそれぞれの個性が尊重されている点にあります。

講義が講師の都合により急に休校になることは日常茶飯事であり、三十分ほど遅れて講義が始まり、逆に延長されることもあります。勿論、時間厳守の講師もおり一つの学科だけでも講義の雰囲気は多様です。学生の在り方も様々で、講義中に食事を始める者や、講師と講義とは特に関係ない話で会話を弾ませる者、気になったことを講師の話を中断させてもすぐに質問する者など数多くいます。

そういった講義風景の中で共通して言えるのは、物理的にも精神的にも学生と講師との距離が近いことです。

具体的に述べると教室が日本の小学生の教室より狭いです。しかし、一学年は五班以上に分かれ講義があるため、一人の講師に対し学生が二十人程と息苦しさを感じるほどではありません。むしろ積極的に学生や講師と積極的に関わるには適した距離感のように思えます。

また、講師が進んで学生との距離を縮めようと試みているようにも感じます。前述のように世間話を学生と始め、また真面目な講義中、不意にスライドの中に女性の水着写真を紛れ込ませそれぞれの好みについて意見を交わしたりしています。日本では少し考えられないことですね。男女共通して一番会話が弾む話題は自分達の家族についてでしょうか。なにはともあれ、学生と講師の間に親しみやすさがわくような会話が多くあります。

加えてチャピngo自治大学の講義には基本的にグループワークがあります。学生間でも盛んに話し合いが行われます。チャピngo自治大学の学生たちは皆、思ったことをそのまま言うのではなく一考してから口に出し、冗談なども周りを見ながら会話に混ぜて話を進めていくので険悪な雰囲気になることはまずありません。数字や知識の羅列では測れないコミュニケーション力を総じて持ち合わせているところは、やはりメキシコに数ある大学の中でもトップクラスであり、そして同級生はその生徒たちであることが窺い知ることができます。こんな感じで会話できるようになりたい、というのが私の目標です。

講師間学生間問わずに会話や意見交換が頻繁に行われ、自分の考えや個性といったものを隠さず意見交換ができる。またそこから学生自身成長することができるからこそ、チャピngo自治大学は一流大学たえるのだと感じました。

さらに、チャピngo自治大学の素晴らしい点は学生へのサポート面にもあります。学生への医療費の及び食費の免除、広い敷地、全国に数多くある実習場などなど、教え上げればきりが無いほどに学生に対する支援の幅は広いです。その一例として冬休み中に参加した講義授業を紹介します。

講義旅行では二週間ほど Quintana Roo 州というユカタン半島に属する州に滞在しました。何ととっても、大学が企画する講義旅行だというのに二週間という長期間であることにまず驚きです。次に、行き先の Quintana Roo 州にも二日かけて大学が所有するバスで行くという一般的にはでは考えられないことに驚愕しました。後に友人から話を聞くと、メキシコ国内の大学でもかなり珍しいようで、チャピngo自治大学以外ではあまり見られないとのことでした。チャピngo自治大学の器の大きさが垣間見れます。

講義名は *interrelación agroindustriales* というもので、内容としてはアグロインダストリーに関する講義であり、今回の講義旅行では蜂蜜そしてサトウキビの生産者や工場などに見学をしました。マヤ時代から続く方法で栽培している蜂蜜や、巨大な砂糖工場など惹かれるものが多くありました。

今回の講義旅行で一番心に残ったことは人との関わりです。半年ほどメキシコで生活を送ってきましたが、日本語を完全に絶って二週間もの長い間共同生活を送るのは初めての経験でした。かなり戸惑うことが多くあり、正直参ってしまうかと思ったこともあります。しかし、同室の同級生たちがよくしてくれたこともあり、とても楽しく過ごすことができました。



図1. 実習先の村にて

また、一番の思い出はマヤ語がまだ残っている村に行ったことです。図1はその際の写真です。

その時、地元の子供達と仲良くなりました。村の各所を案内してもらったり、鬼ごっこのようなもので一緒に遊んだりなどとても良い記憶です。その中で一番の思い出はマヤ語を少々教えてもらったことです。私の拙いスペイン語で聞き、色々なマヤ語の単語や挨拶を子供達に教えてもらいました。しばらく、ずっとスペイン語ばかり勉強してきたので、久々に新しいものに触れると言語学習の楽しさを再認識することができました。そうこうしている内に、二週間の講義実習も終了しました。このような体験ができたのもチャピngo自治大学の支援あってこそ、本当に感謝しております。

兎にも角にも、チャピngo自治大学での長期留学はとても充実したものです。一年間

という長期留学も折り返し地点を過ぎ残りは復路のみとなりました。長いか短いかと問われれば答えに困りますが、残り後半は前半よりも多くのものを学び日本に帰国したいと考えています。